MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

News Letter 中部大学民族資料博物館

vol.03
October 2012

平成24年

「体験学習の場としての博物館利用」の声が増えてきました

地元のボランティアグループへ解説

夏季展示での民族楽器体験の様子

当館の展示室で解説をききながら見学したい、という声をいただくことが徐々に増えてきました。

実際に展示品を間近で目にすることによって、各国の民族の歴史や文化をイメージすることに役立てていくことができるよう、当館では、直接展示品に触れることのできる体験コーナーを設けるようにしています。

今夏開催していた［夏季企画展示］『楽器のはじまり～その素材から』では、収蔵資料からさまざまな国の民族楽器を選出し、音を鳴らすことができるほか、演奏風景や素材に関する解説に焦点をあてたパネルを増設し、楽器の起源について考察する機会としました。

またふだんから、展示室の一角で民族衣装を試着できるようにしています。当館では「素材」をテーマにとりあげることをきっかけとして「道具」や「作品」の構造を知るところから、大学博物館で学ぶ楽しさを提案していきたいと考えています。

索引（いん・さく）

1 平成24年「体験学習の場としての博物館利用」の声が増えてきました

2012春季・夏季行事報告

2 ◇2012春季展示
4月『墨に歌う砂漠の詩』 原田凍谷による書の作品展示、書道部学生による木簡作品展示
民族資料博物館 原田千夏子

3 6月『ラテンアメリカ資料展』
民族資料博物館副館長 宇治谷 恵

◇文化講演［国際人間学研究所共催行事］
『興福寺の天平文化空間構成と国宝館―文化史の新しいデザインにむけて』
国際人間学研究所所長／コミュニケーション学科教授 前田富士男

4 ◇春季連続講演
『酒飯論絵巻―風俗画の原点』
民族資料博物館 原田千夏子
『喫茶文化と博物館』
民族資料博物館副館長 宇治谷 恵
『ミュージアムとは何か 第二のブームを受けて』
民族資料博物館館長 和崎春日

5 ◇名瀬地区家庭科教員研究会
7月博物館所蔵の民族衣装紹介
民族資料博物館 佐藤尚子

6 ◇夏休み企画
“わんぱく隊”民族資料博物館で体験学習
幼児教育学科教授 花井忠征
博物館の意味を再認識した3日間
国際文化学科准教授 中野智章

◇2012夏季展示
展示解説「楽器のはじまり～その素材から」
民族資料博物館 原田千夏子
「チャレンジドチルドレンのための小さな冒険プログラム2012」
作業療法学科准教授 中路純子

7 ◇トピック
和崎館長の『海外博物館探訪紀行』～ベトナム編（その1）

8 2012下半期（秋季冬季）行事案内

4月

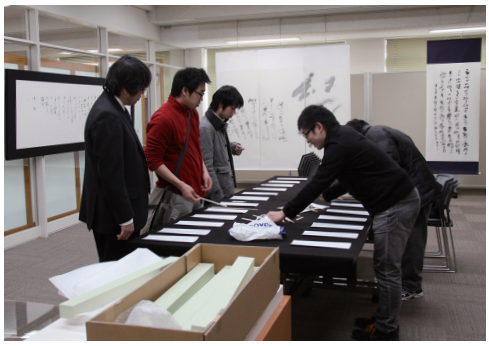
■ 2012春季展示・ギャラリートーク

「墨に歌う砂漠の詩」

原田凍谷（書家・登綈社会長）による書の作品展示
書道部学生による木簡作品展示

‖ 期間 ‖ 2012年4月2日（月）～26日（木）
‖ 会場 ‖ 民族資料博物館 多目的室、図書館1F エントランス

春季展示の案内チラシ



春季展示の準備風景

ギャラリートークの様子

４月の入学式シーズンにあわせて、書道部の指導講師と学生たちによる墨書の作品展示を開催した。テーマは、シルクロードをイメージし、中国大陸で古くから記録媒体として用いられてきた木簡を参考に、墨文字を木片に写し取ることで再現を試み、当時の人びとの文字の感覚を自身の手から感じ取ってみた。また、古来では木簡を紐でつなぎ、長い手紙文として遠距離の伝達方法としても用いられてきたことから、本展示では、書道部員と講師からなる複数の人物によって木簡に墨文字を書き、相互に連結して一連の手紙文として形に再現してみた。また、その他に指導講師により、作家井上靖氏の大陸の紀行文からイメージする旅愁や悠久の歴史風景を想像し、作家の言葉を新たに書の作品に仕上げてみた。

学生らは、2011年3月11日の東日本大震災直後の時期で、隣人との絆の表現に対して様々に思いが寄せられていた世情もあり、若い感性の結びつきを表現というかたちにしてみたいという意識もあった。

本展示の期間が大学においては、門出と出会いを経験する学生へのエールとなれば、というささやかな願いから開催にあたった。

展示期間中には、指導講師による展示室内において木簡の歴史や、書に用いる和紙や筆の種類による表現の特徴などについて、作品紹介を通じながら解説いただいた。（原田）

6月

■ 2012春季展示

「ラテンアメリカ資料展」

‖ 期間 ‖ 2012年6月1日（金）～7月19日（木）
‖ 会場 ‖ 民族資料博物館 多目的室

展示案内チラシ

中部大学民族資料博物館は、世界各地域の民族資料や歴史資料を通して、人類の営みの豊かな多様性を示す地域文化展示とシルクロード（西アジアから中国に連なる地域）資料を展示のベースとした人類の普遍的に見られる諸現象を対象とした通文化展示から構成されている。このほか、多目的室では、学内の研究の成果を特定のテーマや内容で、総合的及び体系的に紹介する企画展示を年に数回開催している。

平成24年6月に学内で開催された「ラテンアメリカ学会」に協力及び関連して6月から7月中旬まで「ラテンアメリカ展」と呼ぶ民族・歴史資料展を多目的室で開催した。

マヤやインカなどラテンアメリカ地域に関連する資料約130点が展示された。中米地域ではメソアメリカ文化の母と言われる巨石文化で有名なオルメカ資料やティティウワカン資料、遺跡で有名なマヤ文化の資料を展示した。南米ではアンデス地方を中心に、チャビン文化、王国で有名なモチェ文化、地上絵で有名なナスカ文化の資料が展示された。

土偶や壷そして染織色など自然の顔料や染料の色彩は今日でもその色鮮やかさに圧倒される。

「ラテンアメリカ資料展」の展示室風景

その色彩や形及び製作技術などを通して、古代から現代までの、ラテンアメリカ文化のモノづくりの発展、変遷を再認識することを目的とした展示会であった。普段の展示会とはことなり、会場には、この地域の専門家や研究者が多数訪ねられ好評を得たのが特徴であった。最後にこの展示会にあたり、資料の出品や展示作業など東京在住のラテンアメリカ専門家である三浦鴻氏に多大な協力を得たことを明記する。（宇治谷）

6月

■ 文化講演［共催行事］

「興福寺の天平文化空間構成と国宝館 —文化史の新しいデザインにむけて」

‖ 期間 ‖ 2012年6月6日（水）　‖ 会場 ‖ 中部大学リサーチセンター　大会議室

講師：金子啓明 氏（興福寺国宝館館長／東京国立博物館名誉館員）　司会：前田富士男（国際人間学研究所所長）

古都・奈良の中心にあって1300年の歴史をもつ興福寺では現在、中金堂復興を中心に天平伽藍を再構築し、<阿修羅像>で知られる国宝館を美の仏殿として機能させる大規模な計画が進捗している。これは、歴史的な建築環境や文化財の保存にとどまらず、より能動的に文化の記憶を再創出しようとする他に例をみない新しい空間デザインの試みである。この計画の中心を担う金子啓明氏を迎え、この重要な試みを紹介していただくこととした。

金子啓明氏は、東京国立博物館の元・副館長で、わが国の古代・中世彫刻の著名な研究者である。しかし美術史研究を学界内の出来事に閉じ込めず、展覧会の企画・運営を通じて、宗教芸術作品としての仏像の本質をひろく一般市民の方々に問いかける優れた展示を実現してきた業績でも名高い。

『仏像　—木にこめられた祈り』展（2006年）、『国宝　薬師寺展』（2008年）、そして国内全体で約200万人の入館者を迎えた『阿修羅展』（2009年）は、たんに今後も凌駕されることのない記録的な展覧会であるのみならず、近現代の日本人がともすると見失いがちな「彫刻」作品、とりわけ聖なる「宗教彫刻」に照明をあてた「場」の構築としてきわめて意義深い。

本講演は、おおきくわけて二つの焦点からなる。第一は『阿修羅展』に現れた問題であり、第二は興福寺の文化空間再構成である。

阿修羅展にこれほど多くの人が集まったのは、金子氏によれば、阿修羅像の持つ魅力そのものに起因する。阿修羅は本来インド系の荒々しい軍神だが、興福寺の阿修羅は、愁いを帯びた複雑な少年の表情をうかべ、見る者に祈りをよびかける存在にほかならない。現代の人間も、祈ることができる、祈りを受けとめてもらいうる——阿修羅の呼びかけは結局、ここに原点を持つにちがいない。金子氏は、仏像の魅力、こうした芸術の力強さをあらためてわれわれも共有することが重要ではないか、と強調され、そのための展示における実際の工夫を詳細に紹介された。

この金子氏の姿勢は、そのまま講演の第二の焦点、つまり興福寺の文化空間再構成に連続する。ここでも、たんに文化財の保護や原状の復元が大切なのではなく、奈良という文化空間、平城京東端の興福寺という場を「再聖化」し、天平文化空間を蘇生させる努力が重要なのである。展覧会でも観光でも、作品—鑑賞という「関係」ではなく、作品を生きる、祈りを託すという「行為」を本質視するのが金子氏の基本的な姿勢にほかならない。

講演ではヴァーチャル・リアリティ映像も駆使しつつ、新しい文化空間デザインが生き生きと提示され、貴重な講演会となった。

（前田）

文化講演「興福寺の天平文化空間構成と国宝館」の様子

6月
|
7月

■ 連続講演

春季連続講演「五感をめぐる生活文化の情景」

‖ 会場 ‖ 中部大学リサーチセンター

■ 連続講演１｜2012 年 6月20日(水) 15：30〜17：00｜

講師：並木誠士 氏（京都工芸繊維大学大学院 教授） 司会：下川辰彦（日本美術院 特待）

講演風景

「酒飯論絵巻―風俗画の原点―」

尾張徳川家の御膝元として、武家文化の名残が強いこの地域においては、昔から芸事が盛んなところといわれている。

徳川美術館学芸員の経歴もある日本美術史家である並木教授は、狩野派をはじめとして近世風俗画に関する気鋭の研究者の一人である。今回の講演では、風俗画そのものの成り立ちをふりかえりつつ、絵画が実際にどのように鑑賞されてきたのか、絵画をとりまく人々の生活観、宗教観を含みながら環境全体へと観点を移していく内容から、学生から地域市民を含む聴衆にとっては、文化の育成される土壌を考えるという意義深い時間となった。

また、京都工芸繊維大学美術工芸資料館の館長でもあらせられる並木教授は、京都における大学ミュージアム連携の活動の中心的存在で、今後も大学博物館の先達として御指南をあおぎつつ相互に交流を深めていきたい。（原田）

■ 連続講演２｜2012 年 7月 5日(木) 17：00〜18：30｜

講師：熊倉功夫 氏（静岡芸術文化大学 学長） 司会：宇治谷　恵（民族資料博物館 副館長）

講演風景

「喫茶文化と博物館」

平成24年７月５日、午後５時30分より、中部大学リサーチセンターにて、現在、静岡文化芸術大学・学長の重責を勤められており、さらに茶道史及び飲食文化など幅広い日本文化研究における著名な研究者である熊倉功夫先生を公務多忙ななかお招きして、上記のような連続講演会が催された。

開催の目的は、茶の湯をはじめとする飲食文化研究の最前線を紹介してもらうこと及び博物館が担うべき役割を示唆していただきたいことであった。民族資料博物館は開館してまだ１年であり、熊倉先生の知識や経験をすこしでも当館の展示や資料収集および博物館活動にいかしていきたい、さらに著名な先生の講演をとおして、当館の活動を多くの市民に理解してもらいたいという願いからであった。

講演の内容は、静岡県掛川市や埼玉県入間市のいわゆる「茶の博物館」の設立や現状、茶の起源をめぐるアジアの茶の湯文化、そして日本の喫茶文化の変遷など、茶をめぐる多様な飲食文化の話題と研究内容の紹介があり、最後にこれからの博物館のあり方についても貴重な提言をいただいた。なお、講演会終了後、関係者とともに洞雲亭と呼ばれる茶室に移動し、見学及び懇談することとした。

講演会場は満席の参加者で熱気に溢れていた。この講演会を実施した成果は、将来、かならず民族資料博物館の展示や活動に生かされるであろう。（宇治谷）

■ 連続講演３｜2012 年 7月19日(木) 15：30〜17：00｜

講師：端　信行 氏（兵庫県立歴史博物館 館長） 司会：和﨑春日（民族資料博物館 館長）

「ミュージアムとは何か　第二のブームをうけて」

アフリカの文化人類学研究者として研究をスタートした端氏は、近年、その豊富な経験と実績から、博物館長としての立場から、都市文化における美術博物館の役割の重要性を訴え続け、さまざまな地域の文化的復興に貢献されている。当館においても、この点は課題の一つであり、地域に開かれた教育施設として、本学独自の大学博物館像を作り上げていくために指導

講演風景

を仰ぎたくこのたびお呼びしたしだいである。

とはいえ、端氏と私は旧知の仲で、若い時分は遠いアフリカの大地で熱く研究談義を交わした懐かしい思い出を共有している。年代を重ねていくにつれて周囲からは、個人研究者のみならず、大学、地域、はては日本人、世界の住人としてのグローバルな意見を求められることが増え、責任を改めて実感する日々だが、そのような機会のたびに端氏の存在が大きな拠りどころとして助けられている。（和﨑）

7月

■ レクチャー

名瀬地区高等学校家庭科教員研究会
「中部大学民族資料博物館所蔵の民族衣装紹介」

‖ 期間 ‖ 2012年7月25日（水）9：30～12：30
‖ 会場 ‖ 民族資料博物館 多目的室・展示室

名瀬地区高等学校家庭科研究会は毎年夏に開催されている。今回は当館が選ばれた。

はじめに会長である愛知県立名古屋南高校校長の久野保彰先生から開会のあいさつがあり、次に宇治谷恵副館長から挨拶と資料から学ぶことの大切さについてなどの話があった。

次に佐藤から「中部大学民族資料博物館所蔵の民族衣装紹介」というテーマで下記の順に話をした。

副館長による概要説明風景

スタッフによる民族衣装の紹介

1衣服の必要性　体毛が減少したため体を守るための衣服が必要になった。

2中部大学民族資料博物館所蔵の民族衣装紹介

(1) 衣服の原点 ……水草などの自然素材をそのまま使用し簡単な加工をする。
(2) 長方形の布類 ‥‥体に巻く、かける
(3) 貫頭衣……長方形または正方形の布を使用。頭の部分に穴をあける。
(4) ワンピース
(5) ブラウスなどの上着とスカートまたはズボン
(6) 上着（ガウン）

3染料　貝紫染め（貝の分泌液を使用）とコチニール染め（ウチワサボテンに寄生するコチニールカイガラムシを使用）を利用した当館所蔵のメキシコの縞巻きスカートを紹介

4衣装が発信するメッセージ

① 仕事や学校などの所属、男女別、警官
② 東アフリカのカンガ（スワヒリ語のメッセージをプリントした布）

5ケニアの牧畜民と農耕民の装いの変容

マーサイ（牧畜民）はなぜガラスビーズで装うようになったか。

6創られた伝統

歴史学者ホブズボーム（Eric Hobsbawm）の「民族文化」についての考えを紹介した。彼は、「近代化」以前には、均質な「民族文化」は存在しない。「民族文化」は、資本による大量生産と市場形成、マスメディアによる流通と均質化の結果、創られたとしている。

最後に、前もって先生方と打ち合わせをした時に佐藤の調査地であるタンザニアの食事情についても聞きたいという要望があった。調査地キリマンジャロの山麓の村の主食の一つであるウガリなどについて話をした。

以上の話の後に館内を案内しながら展示してある民族衣装の解説をした後チマチョゴリやアラビアの男性用衣装などを試着していただいた。

７月末に久野先生と担当の廣瀬先生からお礼状とアンケートの結果を頂いた。「写真でしか見たことのない民族衣装を解説付きで見たり着たりすることが出来てとても良かった」「ケニア、アフリカの文化についてわかってよかったです」「大変楽しくお話をして下さりとても良かった」などのアンケート結果を頂き、今後の励みとなった。（佐藤）

8月

■8月5日（日）～7日（火）

「オープンキャンパス」

■ 現代教育学部｜8月5日（日）14：00～｜　花井忠征（幼児教育学科 教授／フレンドシップ活動代表）

「あつまれ！“わんぱく隊”の博物館見学と体験について」

去る８月５日に、第４回フレンドシップ活動“わんぱく隊”が現代教育学部棟を中心に行われた。参加した66名の子どもたちは、民族資料博物館で世界一周クイズラリーに挑戦した。

博物館を使っての活動は今年で２回目。幼稚園年長児から小学校３年生までとまだ幼い子どもたちに博物館に興味を持たせ、魅力をいかに伝えるかを学生たちは時間をかけて念入りに計画した。今年は「わんぱく世界旅行～どんな国があるんだろう～」というテーマにしたがって、現代教育学部の70号館にダンボールで作った飛行機を用意し、子どもたちはそれに乗って博物館のある三浦記念図書館前まで楽しく並んで移動した。

図書館前広場には風船のアーチで作った博物館入国ゲートがあり、パイロットとＣＡに扮した学生が子どもたちに「今から世界の人たちの生活や珍しい楽器を見に行くよ」と名調子で説明し、わくわくドキドキ感を抱かせた。子どもたちは自分の顔写真が入ったスタンプラリー用のパスポートを持って、ゲートをくぐっていった。ゲートをくぐるときもセキュリティーチェックがあり、子どもたちの気持ちを高ぶらせた。博物館内の各国のコーナーでは、民族衣装をまとった学生が子どもたちに各国の文化や生活用品をわかりやすく説明し、子どもたちは幼いながらも興味深く、真剣に耳を傾けていた。民族楽器を手で触れ、音が出ると歓声が上がり、民族衣装や帽子などを身にまとって満足気に笑顔がいっぱいであった。

世界の貴重な民族資料を目の当たりにし、手で触れる体験を通して、子どもたちはきっと世界にはいろいろな人がいるのだな、いろいろな文化があるのだなと夢を膨らませてくれたと思う。今年の民族資料博物館での活動も、子どもたちにとってたいへん有意義であり、大成功であった。学生たちも多くのことを学ばせていただいた、貴重な時間となった。（花井）

「わんぱく隊」見学風景　（左：アメリカ資料説明、右：民族楽器体験）

国際文化学科　オープンキャンパス風景
（民族衣装の試着）

■ 国際文化学科｜8月5日（日）～7日（火）13：00～15：00｜　中野智章（国際文化学科 准教授）

「博物館の意味を再認識した３日間」

８月５・６・７日の３日間にわたって開催された夏のオープンキャンパスにおいて、民族資料博物館の体験実習室を利用した世界各地の民族衣装試着、ならびに民族楽器の体験コーナーを設置して好評を得た。これは博物館の前身である民俗資料室時代から続く、国際文化学科にとって重要な催しの一つである。

国際文化学科のオープンキャンパス会場は20号館１階のラウンジにあり、広大なキャンパスの中では博物館から少し距離があるものの、そこを訪れた高校生を随時学生アシスタントが博物館へと積極的に引率し、所蔵資料の多様さや実際に博物館を使った授業などが学科で行われていることなどを解説した。学内に博物館があることに関する驚きや、実際に民族衣装を試着してアシスタント諸君とも大いに話が盛り上がったとのことで、実物を用い、書物を読むだけでは分からない、他大学とは異なる一歩踏み込んだ教育を展開している様子を良く理解してもらえたようである。

おりしも博物館では、現代教育学部が主催するわんぱく隊の子どもたちとも遭遇し、自分たちの幼い頃も想い出したとのこと。さまざまな世代の人びとが集まり、共に学び、そして情報を発信する場所としての博物館のありかたを再認識する良い機会ともなった。中部大には多くの留学生も在籍しているため、今後はそうした学生諸君が、自らの地域に根ざした民族衣装などを解説するような機会があっても良いのかもしれない。本来、オープンキャンパスとはもっとさまざまな人びとに開かれる性格のものであって良いはずである。そんな可能性の一端も垣間見ることができた貴重な３日間であった。

博物館職員の方々にも暖かいご協力を頂いたことに深く御礼申し上げたい。（中野）

8月

■ 展示解説

夏休み企画「楽器のはじまり～その素材から」

‖期間‖2012年８月５日（日）～９月７日（金）
‖会場‖民族資料博物館 多目的室・１Fエントランス

夏季には、収蔵資料を毎年テーマ別に紹介していこうと試みている。世界各国のさまざまな民族の生活文化に関連する資料の中から、昨年の「世界の自然気候」に続き第二弾の今年は「民族楽器の素材から知る」を基本に、「楽器のはじまり　～その素材から」と題して、収蔵資料の楽器の中から、骨や角、植物、木の実など材質を通じて観察する解説パネルや演奏写真を補充して展示した。

展示案内ポスター

また、今回の展示期間では、展示室の一隅に楽器に触れることのできるコーナーも設け、多くの見学者に体験してもらった。既製の加工された楽器だけではなく、人類が太古から楽器を通じて祈り、民族の歴史や宇宙を感じ伝えてきた生活の様子を感じる契機になればと考えた。

附属中学校の団体見学風景

期間中は、大学のメーンイベントの一つである、三日間にわたるオープンキャンパスが開催されたほか、地元の高校教員研修会や障がい学生の団体見学を受け入れる機会があり、児童から中高生、一般市民まで幅広い年齢層の来館者があった。今後も当館の収蔵資料を教材として活用できる企画を考えていきたい。（原田）

8月

■ 展示解説

夏休み企画「チャレンジドチルドレンのための小さな冒険プログラム2012」

‖期間‖2012年８月28日（火）12：00～13：30
‖会場‖民族資料博物館 多目的室・展示室

講師：中路純子（生命健康科学部作業療法学科 准教授）

昨年から２年連続して、表記の様な活動を作業療法学科の学生と共に行っている。

今年度は、対象の子ども達が小学校高学年から中学生・高校生であり、普通校に在籍していることから、民族資料館の利用をプログラムの中に入れさせていただいた。障害のある子ども達の自立への道のりを支援することを目的としたこの活動の紹介とともに、民俗資料博物館を使わせていただいた感想を述べさせていただく。

初めての場所で活動することや慣れない人と行動を共にすることは、社会の中で生きるために必要な能力であるが、高い適応能力を必要とするために、障害のある子ども達にとっては難しい課題である。しかし、初めて出会う人が大学生ボランティアであり、学内の食堂や民族資料博物館などの公共施設を利用する事は、社会的行動を、ある程度整備された環境下で学習する経験になる。

障害のある子ども達が、多くの経験を経て地域社会で生活する存在になる過程を支援するための資源として、大学の環境が一つのステップになる事が出来れば喜ばしいと考えた。また、将来、障害のある人たちの生活を支援する立場となる学生にとっても、教育的な経験の場になり得る。そのような私個人の思いと、子ども達の保護者の思いによってこの活動が始まった。

今回、民族資料博物館を利用させていただき、最も良かったと感じることは、民族衣装を着たり楽器を鳴らしたりする事が出来、見るだけでなく体験が出来たことである。子どもの好奇心は、体験することでもっと掻き立てられるし、知識として定着する。従来は、静かにみることだけしか許されないのが資料館などの利用ルールであった。

「触れる」という利用の方法には驚きもあったが、非常にありがたかった。今回の体験を通して、日本以外の国への関心が高まり、今後の学校での学習につながれば更に言うことはない。子ども達は一様に、大学にもう一度行きたいと言ってくれた。その思いの一端に資料館での時間が含まれていることは、子ども達の楽しそうな笑顔が物語っている。来年度以降の活動にも、対象の子ども達にあわせた方法を考えながら、利用をさせていただきたいと考えている。（中路）

TOPIC 1

和﨑館長の 海外博物館探訪紀行

ベトナム編（その１）

ベトナム民族博物館では、広大な庭園を生かした野外展示が併設されている。エデ（ide）社会のロングハウスは母系社会の家族構成で、３世代、４世代が居住できる広い居住空間からなっている。また、ジョライ（jorai）社会の家屋展示は、聖俗をつなぐものとして、つまりあの世とこの世をつなぐものとして、宗教的な意味を持つ。この場合の家屋はお墓を意味し、その周りに死者の家族構成員を木彫人形で囲うように配置して、聖なる死者を家族全員で守ることをかたちで象徴しているのである。

（「中部大学民族資料博物館 平成 23 年度調査研究報告」より抜粋）

写真上：ベトナム歴史博物館パンフレット
写真下：ベトナム民族博物館パンフレット

9月

◇秋季展示

写真展 トプカプ宮殿に秘蔵されてきた〈謎めいた絵画作品〉に見る、15世紀・東南アジアの文化交流 ～シルクロード（砂漠・草原の道）の終焉

企画協力：東西美術交流センター

10月
11月

◇秋季連続講演

比較芸術学講話～美の彩りとかたちのしくみ、～東西美術交流に読み解く

場所：リサーチセンター大会議室

講師予定者
杉村　棟氏　（西アジア美術史：国立民族学博物館 名誉教授）
小町谷朝生氏　（色彩学：東京藝術大学 名誉教授）
川上　實氏　（比較芸術学：元愛知県立芸術大学学長・現同大名誉教授）